

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 6 - 3

教師の生活と意見

目次

教師の役割とは何か	2
要約	8
1. 教師たちの生活	10
●教師としての生育歴	10
●教師の生活時間	13
2. 教師たちの教育観	18
●学校の機能をどう見ているのか	18
3. 教師としての仕事	24
●教師としてしていること	24
●教師として努力していること	27
4. 教職に対する評価	35
●一人前の教師になるまでの期間	35
●セミ専門職としての現実	37
●専門職への道	38
まとめに代えて	42
シリーズ/講座・子ども調査入門 26	深谷 昌志
読み取りの力を深める	44
資料1 調査票見本および集計表	49
資料2 別表	64

教師の役割とは何か

放送大学教授 深谷昌志



放送大学の教材作りに関連して

放送大学で教材作りを始めてから、4年目を迎えようとしている。この間、何人かの研究者の協力を得ながら「学校教育」や「青少年文化」「児童観」などの講義を収録してきた。

周知のように、放送大学は印刷教材を読むと同時に、テレビやラジオの放送教材も活用し、それとあわせて、スクーリングを重ねて

卒業を目指す正規の大学教育で、入学試験を行わず、18歳以上ならだれでも入学できるので、文字どおりの生涯学習の時代を象徴する大学だといわれる。

放送大学へ勤める前、奈良教育大学に籍を置いていたので、長い間、教員養成大学で講義を担当してきた。他の多くの大学と同じように、黒板を背にしてチョークを片手の授業である。それだけに、放送大学でカメラにかまれ、秒に追われながら講義を収録してい

ると、19世紀から、20世紀をとばして21世紀に入ってしまったようなとまどいを感じる。

これまでの講義では、「アメリカの学校で」あるいは「明治の近代学校は」などという時、実物を見せることのできないもどかしさを感じてきた。もちろん、OHPやビデオを活用すれば、ある程度まで可能であろうが、毎週いくつかの異なる講義をするので、ひとつのことに、そんなに多くの労力をさけない。結局、口で語る形となる。

それに対し放送大学の場合、スケジュールにせかされて時間がとれないといっても、45分の講義15回分が2単位で、それを収録するので、1年以上前からテレビのディレクターや印刷関係の編集者もまじえて打ち合わせを始める。そして、必要と思われる資料の作成や映像の収録を進めていく。したがって、アメリカの学校といえ、十分とまでいかなくとも、それなりにアメリカの教室を紹介する映像がうつるし、明治の校舎やその当時の学生の姿も生き生きとうつし出せる。

「百聞は一見に如かず」のとおり、映像の力は予想以上に強烈で、モニターを対象としたデータでも、受講生が、映像を通して、知識を獲得するだけでなく、ものの見方が変わり、感性のレベルにも影響が及んでいた。たしかに、アメリカの教育について何冊かの本を読み、そして、何十分かの話を聞くより、5分間の映像のほうが、教育についての考え方を

変えるのに役立つ場合があろう。

したがって、放送大学が開講され、講義が軌道に乗るにつれて、既存の大学での講義はかなりの脱皮を迫られよう。少なくとも、チョークを片手に、何年も同じ内容を話すなどというスタイルが批判的となる日が近い気がする。

そうはいうものの、カメラを相手に語っているうちに、チョーク1本の魅力も棄てがたいと思えるようになった。映像の場合、どんなに準備を進めたといっても、受講生のレベルを想定して、秒刻みに収録していくので、ワンウェイでの一斉講義となる。それに対し、チョーク1本の場合、知識の伝達量が少ないといっても、学生の反応をみながら、予定の進路を遅くしたり、ある部分を深めたりできる。したがって、考え方によっては、チョーク1本のほうが、個への対応が可能となり、心に残る授業ができるようになるともいえよう。

教師の果たす二つの役割

現在、放送大学では、スクーリングの重要性が構想段階で考えられた以上に感じられ始めている。映像は、しょせん一方通行で、学習を続けられるかどうかは学習者の意欲にかかっている。しかし、残念ながら、意志の強い人が多いといえないから、学ぶ気持ちを持っていても落伍していく人も少なくなかろう。そうした人を励ますと同時に、マスとしての

講義に欠けがちな個への対応を行う場として、スクーリングの機会を利用したいというのである。

個人的な事情ともいうべき放送大学の内部事情について語ってきたのは他でもない。教師の仕事を考えるにあたって、放送大学の事例から学ぶものが多いと考えたからである。

放送大学の場合は極端な形かもしれないが、教師は、多かれ少なかれ、マスとしての生徒に知識や技術を伝達する機能を担っている。授業者としての側面である。それと同時に、通常の講義では、一人ひとりの生徒に目を注ぐであろうから、個への対応的な役割を担っている。そして、そうした側面をつきつめていくと、教師の仕事はカウンセラーに近づいてくる。放送大学の場合、遠隔教育（distance education）の宿命を背負ってスタートしたので、通常の学校と比べ知識伝達の機能が優れている反面、カウンセリング機能に劣る。それだけに、教師の持つ2つの側面がシャープにあらわれてきたのであろうが、通常の活動でも、教師の仕事は、上記の2つの側面を内に含んでいる。

そこで問題となるのは、知識伝達者とカウンセラーという2つの側面を教師がいかに関係をとっていかであろう。そのさい、子どもたちが、どういう教師を魅力的と思うのが教師論を考えるさいの手がかりとなる。

フランクなアメリカの教師

教師のあり方を考えようとする、生まれて初めてアメリカの学校を訪ねた時のことを思い出そう。今から十数年前のことで、見学したのはサンフランシスコ郊外の学校だった。

学校の雰囲気が開放的で明るいのにとまどいを感じたが、それ以上におどろいたのは教師たちの服装だった。ひげもじゃの髪に、ジーンズとTシャツというラフなスタイルの男性が校長だったりする。アメリカ人たちが型にとらわれないのは知っていたつもりだが、それでも、スニーカーをはいた男性が校長となると勝手がちがってくる。

もちろん、そうしたフランクさは服装に限らず、物腰にもあらわれてくる。子どもたちに気軽に声をかけながら、学校を案内してくれる。そして、授業中の教室にも、自然な感じで入っていき、私たちを紹介してくれた。身のこなしが、なんとも軽やかで、それまで持っていた校長先生のイメージが払拭される思いがした。

翌日に訪ねた学校は、ボランティアとして市民の協力を求めているところで、教室には何人ものおとながいて、どの人が教師なのかわかりにくかった。いくつかのグループに分かれて勉強をしている。お年寄りが読みの遅れがちな子と本を読んでいる。そうかと思うと、子どもが持ってきたドリルに添削してい

る女性がいる。ぐるぐる回りながら、問題をといている子の側で指導をしている男性の姿もある。

あとで聞いてみると、この男性が担任で、学期の初めに、月曜日の午前10時頃、ピアノをひいてほしい、水、金の午後1時間、体育の相手をしてもらいたい。算数の採点の手助けを頼むなど、具体的な活動を提示して、親たちの協力を求める。そして、教師と十分に打ち合わせをした後、指導を頼むとのことであった。素人の親に子どもの指導をまかせて良いのか気がになったが、1人で何でもしようとする、何もできなくなる。だから、重要な部分を自分が受け持ち、他の部分は、目標をはっきりわかってもらった上で、親の協力を求めていると、その教師は語っていた。

アメリカだけに限っても、学校の見学を何度となく重ねているうちに、さまざまなタイプの教師のあり方に接することができた。

中でも圧巻だったのはシアトルの学校で、ここでは、市のオーケストラの指導者やプロのアメリカン・フットボールのヘッドコーチなどが校区に住んでいるので、それぞれ、月に2回くらいの割合で、ビディチング教師をしていた。プロ・チームの本物のコーチから指導してもらえるとというのがすごい人気で、たまたま見学した日、100人以上の子どもが熱心にバスやランニングの練習をしていた。

こうした事例が示すように、われわれは、

当然のこととはいえ、日本の教師をイメージに置いて、教師像をとらえる。しかし、その場合の教師像は、日本の中という制約の中で作られたもので、世界的な視野で見直すと、ひとくちに教師といっても、その姿が多様なのに気づく。

アメリカの教師の長所・短所

アメリカの教師——といってもさまざまだが、概していえば——は、もともと、一斉授業を苦手としている。というより、教育とは、生徒自身が学習するもので、教師は、生徒の学習を助ければよい。したがって、学習をする単位は、まず、個人、ついて何人かのグループとなる。そして、一斉授業は、例外的にやむを得ない場合に限り展開するスタイルというような教育観が定着しているような印象を受ける。

したがって、アメリカの中学を参観すると、市製のドリルを使った個人学習やグループ・ワークが目につき、一斉授業の割合は少ない。

ワシントン州の首都・オリンピアの中学で社会科の授業を見る機会があった。ワシントン大学の大学院を修了した若い女教師が、アメリカ民主主義の本質を一斉授業の形で展開したもののだが、「アメリカの民主主義を象徴するものは何だと思えますか」の質問から授業が始まった。

何人かの生徒が挙手をすると、すぐに指名

し、発言を黒板に記録していく。

知事を選挙できる

なにをしゃべってもよい

労働組合がある

男女平等

信教の自由

などである。生徒の発言がとぎれると、「他に何かない」と問いかける。見ている間に、98の項目が並んだ。

生徒の発言を、そのまま板書しているだけだし、ひとりで10回も答えた子がいる反面、だんまりをきめこんだ生徒が数人見られる。

しかし、こうした方法は先を急ぐための方便で、一段落したところで、98項目をいくつかにグループ分けし、不正確な答えを訂正しながら、全体像をまとめていくものと信じていた。

ところが、98項目で生徒の反応がとぎれると、「本当は、100まで書きたかったのに」と残念そうにいい、「でも、とてもよくできたわ」と感想を述べた後、板書はそのままにして、「アメリカの民主主義」というVTRを回し始めた。20分で、放映が終わった。「それでは、水曜日は、アメリカの歴史をやりますから、リンカーンなどの大統領のことを調べておいてください」が、まとめを兼ねての言葉だった。

日本の感覚からすれば、指名の仕方は無神経だし、生徒の発言の扱い方もずさんにすぎる。

また、全体の要約や構造づけをしないなど、教育実習生でも、もうすこしましな授業をするのと思う。しかし2年後、オリンピックを訪れた時、この先生は社会科の資料集を編集する責任者に就任していた。どうやら、市を代表する前途有望な教師としての評価を得ているようであった。

そこで次の年の夏、日本の中・高校生をつれてアメリカへ滞在した折、英語の指導をその女の先生に頼むことにしてみた。

まず第1日目は、大きなバンの中に、野菜や肉などの食糧品を山積みして登場した。そして、とうもろこしやトマト、じゃが芋などを手にしながら、一人ひとりの生徒に発音をさせる。“Good”, “Loud, please, Excellent”, “Perfect”, “Wonderful” など、ほめ言葉の種類が多い。しかも、やさしくほほえみながら、発音を矯正していく。

2日目は、洋服だった。この日は、男性用や女性用の上着や下着を、茶目つけたっぷりに出しながら、一人ひとりに発音させる。正直に言って、まどろっこしい気がする。なにしろ、1人が発音している間、他の生徒は、その生徒の発音を聞いているだけになる。

3日目は市の地図、4日目はレストランのカタログ、実物を使っての授業が続けられていった。この女教師がスリムで、下はジーパン、上はブラウスというしゃれた服装の上に、ブロンドの美人の条件が加わったためもある

うが、日本の生徒たちは先生に魅せられ、生徒たち全員の「心の恋人」というムードが高まっていった。

正直なところ、この授業は、夏休みを利用したスクールで、授業の効率をあまり考えてなかった。つまり、米会話を目的としているので、米語にふれるだけでも、目的のなかばを達することにもなる。そうした特殊な条件下でも、効率の面から考えると、疑問を感じないわけではなかった。一人ひとり、「ポテイトー」、「コーン」などと発音させるので、2時間近い授業なので言葉の習得数は限られざるをえない。

同行していた日本の英語の先生は、「LLを使えば、この何倍かできるのに」と、彼女の授業に批判的であった。しかし、進度が遅いように見えても、彼女が、日本の生徒たちの心をつかんでいるので、生徒は、先生から少しでもほめられたいと、いじらしいくらいの努力をしているのは明らかだった。そして、少なくとも、3週間のうちに、生徒たちの発音は、びっくりするくらいの上達ぶりを示した。

子どもの心への配慮を

彼女に限らず、アメリカの教師たちは、子どもの扱いがうまい。これもサマースクールの体験だが、中学の国語担当というある教師は、教室へ入ってくるなり、まじめな顔で、発音練習を始めた。“Oh!” について“ha”そ

して“yo”。バラバラで発音させた後、つづけて発音してみようとうながす。もちろん、「オハヨウ」になる。生徒たちは緊張していただけに、思わずにこっとして、学習が始まる。

そうかと思えば、「日本については、よく知っている」と前置きしてから、「トウキョウ」、「サダハル・オー」、「トヨタ」、「トウキョウ・ジャイアンツ」……と、知っている限りの日本語をしゃべって自己紹介に代えた人もいたし、ギター片手に登場して、ビートルズナンバーのひきがたりをして、生徒たちをびっくりさせた教師も思い出に残る。

それぞれの仕方で、生徒たちの心をひきつける工夫をこらしている。そして、生徒たちの心を十分につかんだ上で、個別指導を徹底させるというスタイルである。

アメリカと日本との間には教育風土の違いが多いから、どちらの教師のほうが望ましいかは安易に結論づけられないように思える。しかし、大づかみにすると、

日本……………一斉教授……知識の伝達

アメリカ……個人指導……学習への動機づけ、のような類型が成り立とう。

先回りをして問題を指摘しすぎたのかもしれない。以下、具体的なデータに則して、日本の教師たちが、そうした知識の伝達と子どもの心への配慮を、どうとらえているのかを考えていくことにしたい。

調査レポート／教師の生活と意見

要約



①教師の1日

6時16分に起床し、家を出るのは7時23分。そして学校へ7時56分に着く。学校を出るのは平均して午後6時13分で、在校時間は10時間17分。帰宅するのは6時39分、11時11分に就寝。睡眠時間は7時間5分というのが平均値となる。(表3)



②成績についての見方

成績の良し悪しは予習や復習などの学習努力に比例するという見方を、母親たちの64%は「まったく」「かなり」信じている。それに対し、教師の中でそう思っている者の割合は40%にすぎない。教師は多くの子どもに接しているので、母親ほど純粋に学習努力が成績に反映されるとは言い得ないのであろう。(表5)



③学校の機能について、教師と母親にズレ

教師たちは、学力や友とのつき合い方を学校を通して身につけうると信じている。しかし親たちは、それ以上に学校に対して期待を抱き、特に友とのつき合い方や体力を学校で育てうると考えている。教師たちは学校の機能に限界を感じ、その分、家庭の機能に望みを託している。(図7、表7)

調査概要

1. 調査主題 教師の生活と意見
2. 調査視点 日本の中での狭義の教師像にとらわれずに、教師の果たす役割とは何かをとらえる。「知

- 識の伝達」と「子どもの心への配慮」を、教師たちはどのようにとらえているかをさぐる。
3. 調査項目 子どもの望む教師像のとらえ方／子どもとの対応の中での教師としての実感／教職について（一人前になるには・専門職としての程度・

放送大学教授 深谷 昌志

④教師の評価と子どもの見方

教師としては、子どもにいろいろと尽くしているつもりだという。しかし子どもたちは、それほど教師からしてもらっていないと答え、教師の評価と子どもの見方とのズレが目につく。

(図10)



⑤教師として気にしていること

忙しすぎて、子どもと接する時間がとれないことと、うまい授業をなかなかできないこと。

(図17)



⑥教職の理想像

37%の教師は教職の現在を専門職を志望するセミ専門職としてみなし、将来の理想の姿は、教職の専門職としての地位が確立されることだという。(表11)



社会的自信の程度) / 教育について (子どもの能力のつけさせ方・子どもの塾通いについて) / 教師の履歴など

4. 調査時期 1985年 (S.60) 11~12月

5. 調査対象 全国の小学校教諭

6. 調査方法 全国1,000校の学校送付による質問紙調査

7. サンプル 885名

1. 教師たちの生活



教師としての生育歴

まず、サンプル構成を示しておこう。表1のように、男女構成や年齢構成など、ほどほどの分散を示していて、大きな偏りは少ない。また、校長・教頭の比率も8.7%で、それほど多くはない。

したがって、日本の教員構成の厳密な意味での縮図といえないことはたしかであろうが、以下のデータが偏った一部の教師の意見でなく、かなりの教師の心情を代弁しているとみなすのは可能であろう。

なお、サンプルの生育歴を表2に示した。経済的には、貧しくも豊かでもない。ふつうの家に生まれ、父親は会社員で、母親は専業主婦、そして、小学校時代は特別によくできたわけではないが、まあふつう以上の成績だったというのが、教師たちの標準的な生育歴となる。

なお、子どものころ、先生から目をかけて

もらっていた者が多い。まじめでリーダーシップもあり、教師から信頼されるタイプの子どもだったのであろう。そして、教師になろうと思った時に、誰かの影響を受けたかについて、表中の通り、3分の2近くが、誰かに感化されて教職を志したという。

そして、教師についての気持ちは、以下のように、半数以上が、積極的だったと答えている。

教師に なるのに	積極的	とても	27.8	56.8%		
		かなり	29.0			
	ふつうくらい	やや	19.0	40.0%		
		ふつうくらい	13.2			
		消極的	やや		7.8	3.2%
			かなり		2.6	
	とても	0.6				

しかし、「教職をやめたいと思ったことは」の問いに、「いつも」の4.5%を含めて、28.8%は、「何回か」そう思ったと答えている。したがって、子どものころから希望し、そして積極的に教師になったものの、教職の実際は、子どものころに考えていたほど、甘くなかったのかもしれない。

職直人生につたをくらやか教り	つく	ぜ ひ	16.6%	} 33.8%
		かなり	17.2%	
		や や	9.7%	
	つきたくない	なんともいえない	36.6%	} 50.6%
		や や	4.3%	
		あまり	11.1%	
		ぜんぜん	4.5%	} 15.6%

表1 サンプルの属性

(%)

性 別	1. 男 51.3	2. 女 48.8	
年 齢	1) 25歳以下 9.7 4) 35~39歳 17.8 7) 50~59歳 18.2	2) 26~30歳 20.5 5) 40~44歳 11.1 8) 60歳以上 0.5	3) 31~34歳 13.1 6) 45~49歳 9.1
出 身 学 校	1) 教育系大学(国・公・私立)59.4 3) 教育系以外の大学(私立)14.8 5) 師範学校 3.8 7) 大学院修了 0.7	2) 教育系以外の大学(国・公立) 3.7 4) 短期大学 14.5 6) 旧制の大学(国・公・私立) 0.2 8) その他() 3.0	
教職の経験年数	1) 3年以下 11.7 4) 10~14年 16.0 7) 30年以上 14.1	2) 4~6年 12.9 5) 15~19年 15.0	3) 7~9年 14.3 6) 20~29年 16.0
担 当 教 科	1) 算数……………90.8 3) 理科……………86.5 5) 体育……………87.9 7) 家庭……………37.9 9) 音楽……………54.6	2) 国語……………92.0 4) 社会……………88.1 6) 図画工作………78.0 8) 道徳……………89.3 10) 特別活動………93.6	
現在勤務している小学校は	1) 1校目……………19.7 3) 3校目……………19.0	2) 2校目……………25.7 4) 4校目以上………35.7	
小学校での係または役職	1) 校長・教頭… 8.7 3) 生活指導主任12.0 5) 教科主任………53.1	2) 教務主任………11.2 4) 学年主任………42.5 6) その他………40.1	

シ
子
ろ
つ
こ
下
え

表2 教師の生育歴

—子どものころ、担任から信頼されていた—

(%)

生活程度	とても豊か	0.8	やや貧しい	25.7				
	やや豊か	12.6	とても貧しい	5.6				
	ふつう	55.3						
父の仕事	会社員	46.0	農・漁業	14.4				
	教員	13.2	その他	9.2				
	自営	17.2						
母の仕事	専業主婦	47.4	教員	5.1				
	家業	11.8	つとめ人	9.2				
	農・漁業	19.3	その他	7.1				
教職に影響を与えた人	いる	64.6	肉親	44.7				
	いない	35.4	担任など	55.3				
肉親の教職者	父	17.9	おじ・おば	30.7				
	母	11.6	いとこ	31.4				
	兄弟	25.1	(一度でもつとめた者)					
子ども時代	学業	あ		ふつう	ない			
		とても	かなり		やや	やや	かなり	とても
	リーダーシップ	9.9	32.0	34.2	19.4	2.3	1.7	0.5
	友だち	7.4	23.1	26.1	24.8	11.3	5.3	2.0
	教師の信頼	10.7	25.2	21.1	33.9	7.2	1.7	0.2
		12.3	34.3	26.7	20.6	4.0	1.7	0.5

以上のように、人生をやり直せたら教職につくかの問いにも、「もう一度教師をやってほしい」と答えたのは3分の1を上回る程度

で、半数以上が「なんともいえない」、あるいは「つきたくない」と現在の気持ちを語っている。

教師の生活時間

教師の意見を紹介する前に、教師の1日を概観しておこう。図1は起床時刻を示しているが、少数の早起きの者を除くと、6時から6時半にかけて床を離れる。

そして、図2のように、平均すると7時23分、遅くも8時頃には家を出て学校へ向かう。起床から家を出るまでは、ほぼ1時間7分で、この間に、洗面、トイレ、食事、着衣などのスケジュールをこなすのであるから、あわただしい時間なのであろう。

通勤に要する時間は、「5分以内」という職住接近の5.5%に、「10分以内」の11.4%

を加えると、2割近くが、学校のごく近くに家がある計算になる。そうした反面、通勤に1時間半以上もかかる者も1%と、数は少ないながら、認められる。それでも、全体としてみると、都市のサラリーマンのように通勤時間の長い者は少なく、32分が平均の通勤時間となる。

なお、教師たちは、ほぼ8時前後に学校に入っている(図3)。多くの企業では9時始業と聞く。マスコミ関係では9時半始業も少なくない。そうした意味では、8時に職場へ入っている教職は、朝の早い仕事といえよう。

図1 起床時刻

——平均すると6時16分——

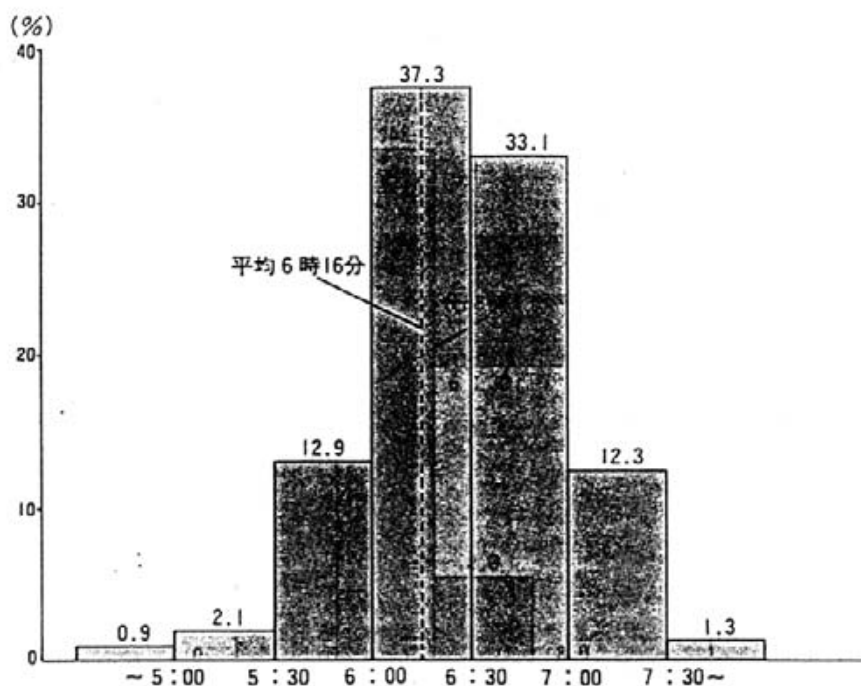


図2 家を出る時刻

— 8時頃に出る人も —

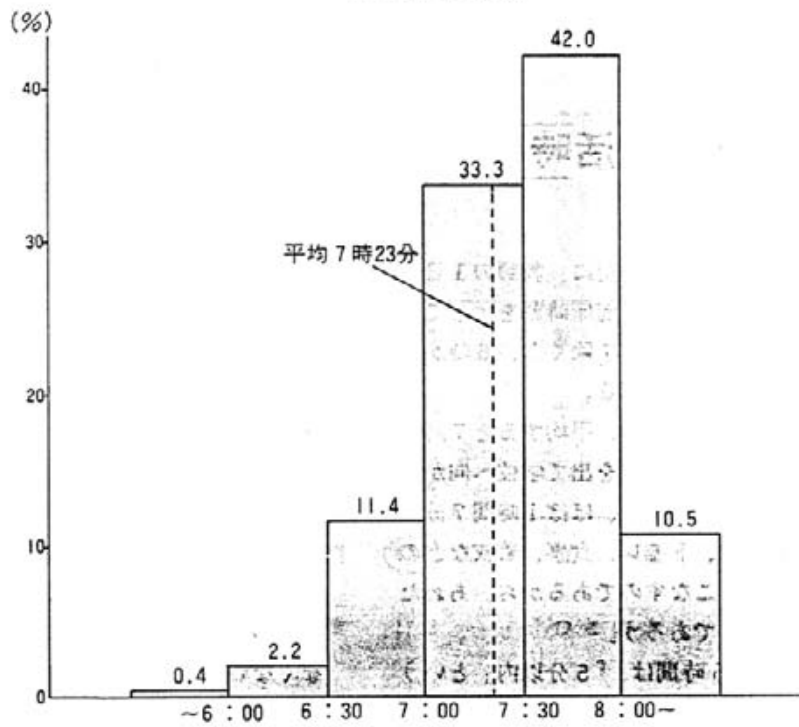
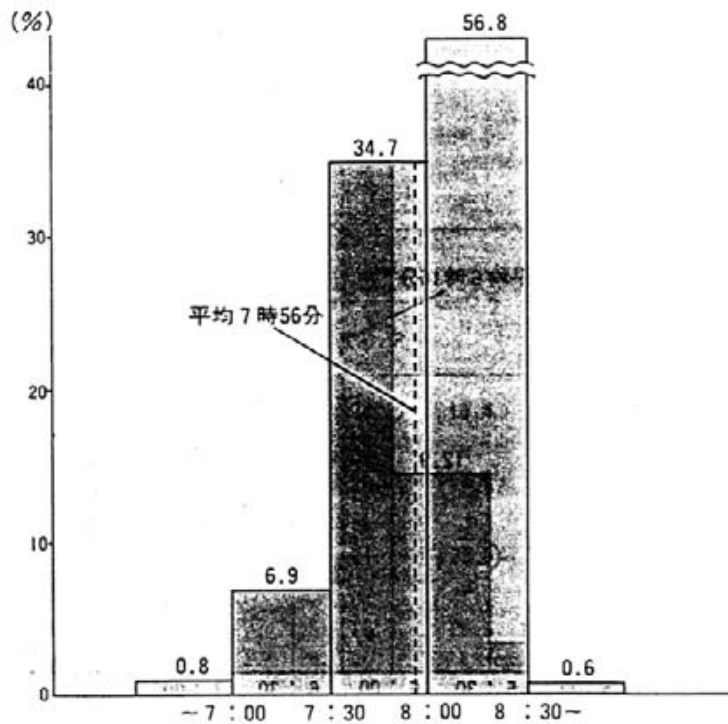


図3 学校へつく時刻

— 8時前後に学校へ —



そして、かりに8時間労働をしたとすれば、8時から4時までが就労時間となる。しかし4時までに下校する教師はまれで、早くても5時少し前。そして、5時半から6時にかけてが下校のピークとなる(図4)。したがって、教師の在校時間は10時間17分と、かなりの長さとなる。

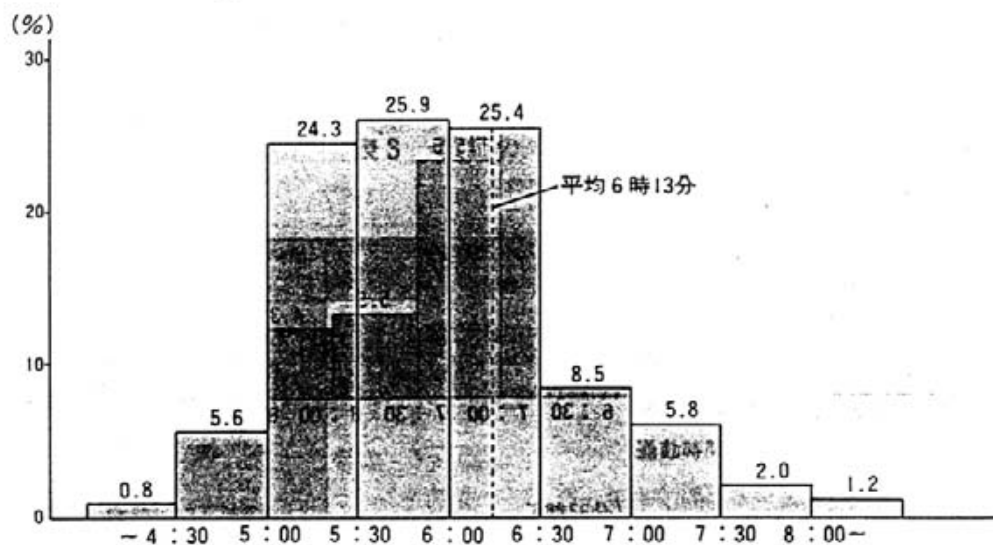
もちろん、学校にいる間は、子どもたちのいる時はまったくというほどに休みをとれないし、子どもが帰宅後も会議の連続で、休息のとれないスケジュールであろう。そう考えると、10時間を越える在校時間は、実際の勤務の長さと思われ、教師の過労が気がかりとなる。

教育界では、伝統的に「ちょうちん学校」と

いわれる慣習があり、熱心な学校ほど、夜遅くまで働いている教師が多いといわれる。たしかに、教材についての解釈を深めたり、指導法を打ち合わせたりするのに、多くの時間が必要となろうし、子どもをめぐる問題の山積している現代なので、子どもへの対応をめぐる話し合いが持たれる機会が増すのも当然であろう。

したがって、教師の在校時間が長びくのもやむをえまいが、その他、個々の教師たちは教材の作成や指導案作り、プリントなど、授業に必要な準備にかなりの時間をとられる。それだけに、疲労を蓄積することなく、生き生きと授業をしていくためにも、可能な限り在校時間の短縮を図るべきであろう。

図4 学校から出る時刻



なお、教師たちの帰宅時刻は、平均すると6時39分となる(図5)。朝家を出たのが7時23分であるから、家をあけていた時間は11時間を越える。独身の教師はともかく、既婚の女性教師などは、こうした中で、どうやって家庭生活をやりくりするのかが気がかりとなる。

そして、8時少し前に遅めの夕食を食べ、就寝するのは、図6のように11時過ぎとなる。

こうした教師の1日を時間を追った形でひとつの表にまとめたのが表3で、この中では、やはり在校時間の長さが目につく。学校生活

を中心に、教師の1日がまわっているという感じである。

学校にいる時間が長く、それ以外の社会のふれ合いに乏しい。そうした生活が続くと、視野が狭くなり、独善的になりはしないかと思う。それと同時に、日常生活の忙しさに追われて、教師として必要な新しい情報をどうやって入手していくのかが心配になる。もちろん疲労の蓄積も気になるなど、教師の生活時間の中に、さまざまな問題がひそんでいるのを感じる。

(1日の生活時間の詳しいデータは別表を参照)

図5 帰宅時刻

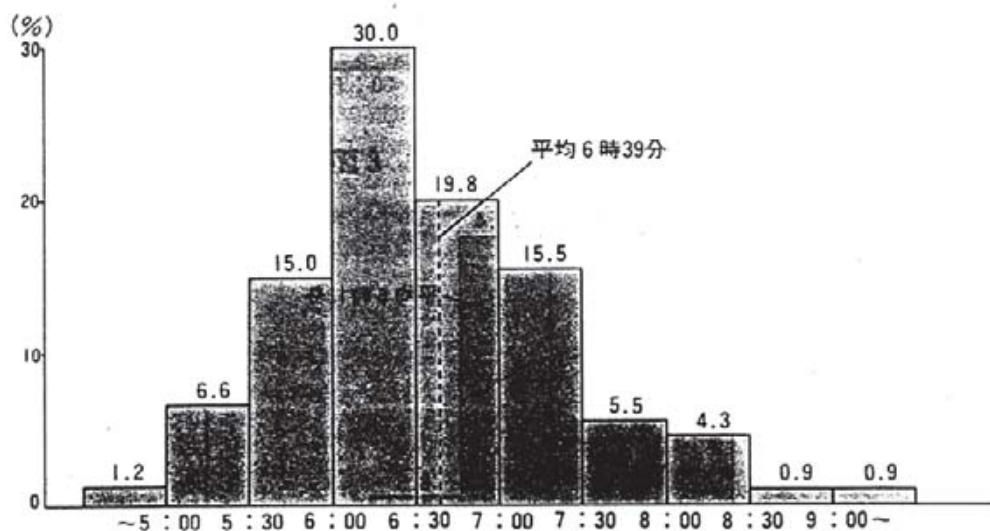


図6 就寝時刻

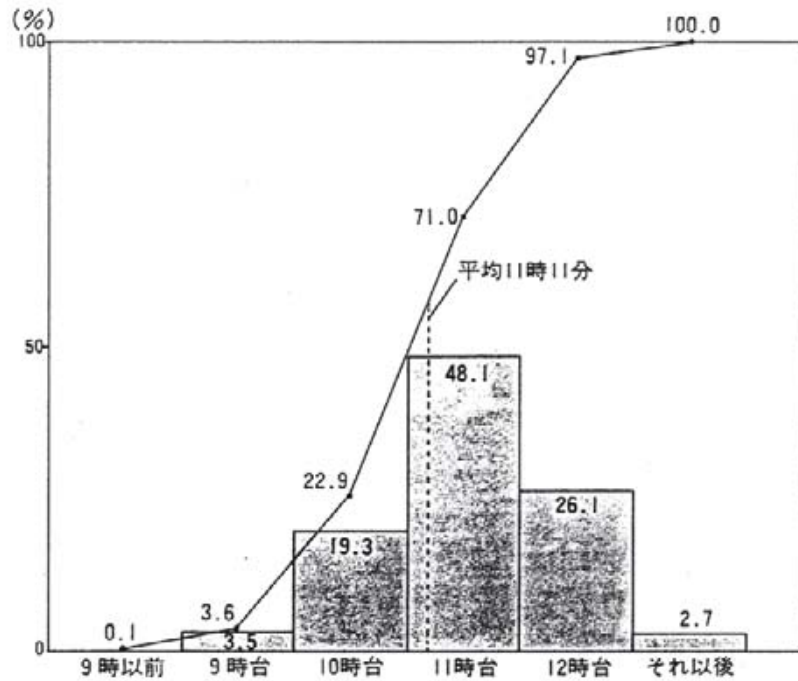


表3 教師の1日

— 在校時間10時17分 —

項目	時刻・時間	時刻	時間
起床時刻	午前 6時16分		
家を出る時刻	7時23分		在宅時間 1時間7分
通勤時間			通勤時間 32分
学校へつく時刻	7時56分		
学校を出る時刻	午後 6時13分		在校時間 10時間17分
帰宅時刻	6時39分		
夕食時刻	7時38分		在宅時間 4時間32分
就寝時刻	11時11分		
			睡眠時間 7時間5分

2. 教師たちの教育観



学校の機能をどう見ているのか

教師と話をしていると、教育についての見方が世間の人とちがっていると思うことが多い。もっとも、教師は教育問題についてのスペシャリストなのであるから、教育についてのアマチュアの意見とプロのそれとが異なっていて、むしろ当然なのかもしれない。

そのさい、教師の見方がどういう点で一般の人と異なっているのが重要となる。表4は、一流大学卒の肩書きがどうなりそうなのかを教師に回答を求め、それを、母親の反応と対比させたものだが、教師たちの見方は、学歴の重みは「変わらない」か、あるいは「やや下落ぎみ」に集中している。それに対し、母親の反応は、値打ちが出ると思っている者から下がると感じている者まで、ちらばりが多い。その人なりの考えがあって、ひとこと

にまとめにくいのが、母親たちの反応なのかもしれない。

表5に、成績についての見方が、母親と異なるかどうかを示した。この中で、学業成績は子習や復習などの学習努力に比例するかについて、教師と母親との見方のちがいが目につく。

		教師	母親
子・成績の良さは 復習に比例	そのと おり	まったく	(5%) (24%)
		かなり	(35%) (40%)
			40% < 64%
	半分半分	やや	33% > 23%
		ちがう	(19%) (10%)
ちがう	やや	(9%) (3%)	
	まったく	(28%) (13%)	
		28% > 13%	

ほとんどの母親は、成績の良し悪しは、学習や復習などの学習努力に比例すると信じている。しかし教師たちは、子どもに常日ごろ接し、勉強の得意・苦手に、努力を越えた部分があるのを知っているためか、母親ほど純粹に、学習努力の成果を信じられないのであろう。

また、「きちんと勉強すれば望みの学校へ入れる」についても、母親たちの間にそうした気持ち強いが、塾通いについての評価を表6に示した。ここでも、親との評価のズレに注目してみよう。

1) 教師のほうがそう思う割合が高い

教師 母親

- ①塾に行かないと勉強しない 17% > 13%
 ②他の友が通っている 13% > 6%

2) 教師と母親との見方はほぼ同じ

子どもの実力以上の高望み 37% = 37%

3) 母親のほうがそう思う割合が高い

- ① 学校ではわかるまで勉強を教えてくれない 4% < 19%
 ② 学校では個性に合った教え方をしない 2% < 13%
 ③ 受験に学校だけでは不十分 34% < 43%

(とてもそう思う割合)

表4 一流大学卒の肩書きはとなりそうか

— 変わらないか、やや値打ちが下がる —

(%)

尺度	値打ちが出る			変わらない	値打ちが下がる		
	ぐんと	かなり	やや		やや	かなり	ぜんぜん
教師	1.4	5.2	2.9	48.3	30.1	11.2	0.9
母親	3.1	6.4	4.2	42.8	25.4	14.8	3.3
	9.5					12.1	
	13.7					18.1	

< 関西の小学生の母親、約1千5百名(昭和59年6月)の調査より >

念のために、もう一度、表6の中から「そう思う」に着目して、塾通いの理由として、教師と親とがあげる理由の3位までをあげてみよう。

	教師	母親
1	実力以上の高望み (37%)	学校では不十分 (43%)
2	受験に学校では不十分 (34%)	実力以上の高望み (37%)
3	塾に行かないと勉強しない (17%)	学校がわかるまで教えてくれない (19%)

教師も母親も、子どもの実力以上の高望みが塾通いを招くという見方では一致している。そうした中で、母親たちは、学校の勉強だけでは望みの学校へ入れないし、学校ではわか

るまで教えてくれないと、学校に不信感を投げかけている。それに対し教師たちは、塾に行かないと勉強をしない、他の友だちも塾通いをしているなど、子どもたちや母親たちの主体性のなさを問題視している。

つきつめていえば、親たちは学校を批判し、教師は親たちの頼りなさに不信感をあらわにしているという感じである。

それでは、学校の機能を、教師たちはどのように評価しているのか。図7によると、学校で生活習慣を作ったり、豊かな情操をつちかうのはむずかしいとしても、学力や友とつき合う態度は十分に伸ばしうるといふ。

念のために、教師たちの学校についての自己評価を、母親たちの見方と対比(表7)さ

表5 成績についての見方

—親のほうが努力を信じている—

(%)

		まったくその通り	かなりその通り	ややその通り	半分半分	やや違う	かなり違う	まったく違う
1)成績の良し(悪し)は、予習や復習などの努力に比例する	教師	4.9	34.6	32.6	19.2	5.7	2.8	0.2
	母親*	24.2	39.8	23.0	9.9	1.6	0.7	0.8
2)小学校時代の学業成績の良さは、一流大学への入学に通じる	教師	0.7	8.0	20.3	26.3	18.8	19.1	6.9
	母親	2.0	9.2	16.8	33.8	17.0	11.6	9.6
3)授業をまじめに聞き、予習や復習をきちんとしていれば、望みの学校へ入れる	教師	3.3	18.1	24.8	25.3	17.9	8.4	2.3
	母親	8.3	18.9	20.8	24.1	14.4	7.8	5.7

(※「モノグラフ・小学生ナウ」vol. 4-12より)

せてみよう。

	教師	母親
算数などの学力	35.8%	> 33.1%
友とつき合う態度	18.4%	< 35.6%
基礎的な体力	11.6%	< 16.6%
やる気やがんばる力	7.4%	< 12.1%
豊かな情操	4.1%	< 6.6%
基礎的な生活習慣	2.4%	< 5.5%
	〔十分に身につけられる〕と思う割合)	

皮肉なことに、親たちの間で、学力についての評価は、教師より下回っている。しかし

その他の面では、学校により強い期待を抱いている。友とのつき合い方や体力、がんばる力などを、学校を通して育てるのは可能だと親たちは考えているが、教師たちは、学校の果たせる役割はおのずと限られていると感じている。

表8は、図7と同じように学校の機能をたずねたものだが、これは算数や国語の学力や基礎的な体力をどこで身につけるのが望ましいのかを、全体を10.0とし、それを学校～地域社会までの4領域に分けて求めた結果である。

表6 塾通いの理由

—親の高望みと教師は思い、親は学校に不満—

(%)

		そう 思う	やや そう思う	半分 半分	ややそう 思わない	そう 思わない
		教師				
1)親が、子どもの実力以上の高望みをした進学を考えるから	教師	36.7	47.0	11.1	3.6	1.5
	母親	37.0	33.9	15.4	7.2	6.5
2)よい高校や私立中へ入るには、学校の教育だけでは不十分だと思うから	教師	34.3	43.9	13.6	5.1	3.1
	母親	43.0	33.4	14.4	4.4	4.8
3)塾に行かないと、勉強をしないから	教師	17.4	45.3	23.1	8.2	6.0
	母親	12.5	33.2	27.8	10.2	16.3
4)他の友だちが通っているのだから、そのつき合いの意味もあって	教師	13.0	50.3	21.6	9.3	5.8
	母親	5.8	18.5	23.1	17.6	35.0
5)学校では、よくわかるまで勉強を教えてくれないから	教師	3.5	26.8	28.7	26.9	14.1
	母親	18.7	24.1	26.3	12.5	18.4
6)学校では、子どもの個性に合った教え方をしてくれないから	教師	2.4	17.4	27.0	31.9	21.4
	母親	12.7	25.6	25.1	14.2	22.4

(※「モノグラフ・小学生ナウ」vol. 4-12より)

	学校		家庭	
	教師	母親	教師	母親
1 学力	8.0%	< 8.3%	1.6%	> 1.1%
2 体力	5.8%	< 6.4%	2.4%	= 2.4%
3 友とつき合い	5.6%	< 6.3%	2.1%	> 1.9%
4 やる気	5.0%	< 5.4%	3.7%	> 3.2%
5 情操	4.2%	< 4.5%	4.1%	> 3.7%
6 生活習慣	2.8%	< 3.7%	6.2%	> 5.4%

この中で興味深いのは、上述のように、母親たちは教師が思っている以上に、学校に強い期待を抱いているのと同様に、教師たちは母親が思っている以上に、家庭の機能を高く評価している事実であろう。「隣の芝生は青く見える」のとえのとおり、親たちは学校の可能性を信じているのに対し、教師たちは、学校の限界がわかっているため、家庭の役割に望みを託すのであろう。

図7 学校を通して身につけられるか
— 学力、そして友とつき合う態度 —

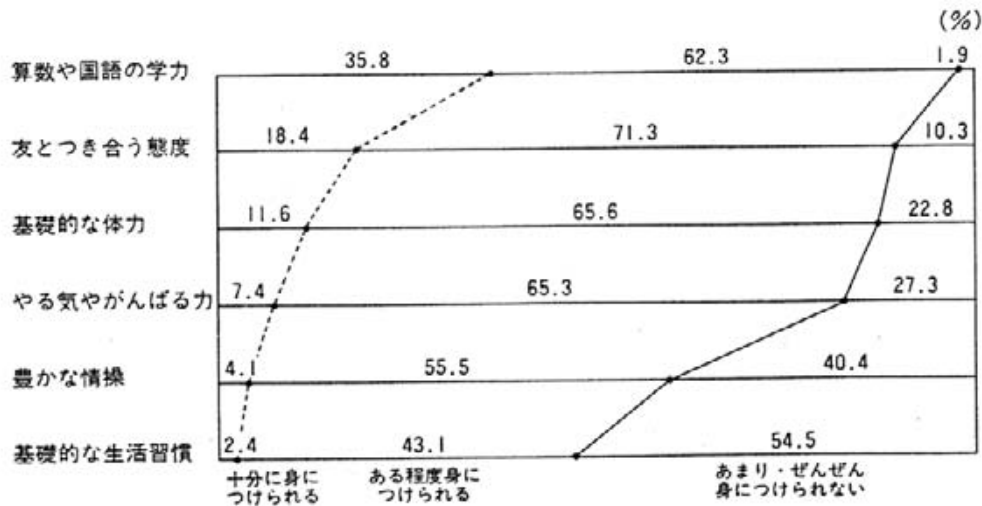


表7 学校を通して身につけられるか(教師と母親)^{*}

(%)

項目	尺度	身につけられる		なんとも いえない	身につけられない	
		十分に	ある程度		あまり	ぜんぜん
算数や国語の学力	教師	35.8	(62.3)	1.6	0.3	0
		98.1			0.3	
友とつき合う態度	教師	18.4	(71.3)	7.7	2.6	0
		89.7			2.6	
基礎的な体力	教師	11.6	(65.6)	13.8	8.8	0.2
		77.2			9.0	
やる気やがんばる力	教師	7.4	(65.3)	21.8	5.3	0.2
		72.7			5.5	
主に理由も聞かれない 豊かな情操	教師	4.1	(55.5)	28.3	11.9	0.2
		59.6			12.1	
主に自分が習いごとをみんなの前で 基礎的な生活習慣	教師	2.4	(43.1)	27.8	25.0	1.7
		45.5			26.7	
	母親	33.1	(62.1)	3.8	0.9	0.1
		95.2			1.0	
	母親	35.6	(56.2)	6.0	1.9	0.3
		91.8			2.2	
	母親	16.6	(67.1)	12.3	3.6	0.4
		83.7			4.0	
	母親	12.1	(62.7)	17.9	6.4	0.9
		74.8			7.3	
	母親	6.6	(54.3)	25.9	12.1	1.1
		60.9			13.2	
	母親	5.5	(54.3)	20.3	18.4	1.5
		59.8			19.9	

(*「モノグラフ・小学生ナウ」vol. 4-12より)

表8 どこで身につけるのが望ましいか

—学力と体力は学校で—

注) <全体で10.0> (%)

	教 師				母 親 [*]			
	学 校	家 庭	学習塾や おけいこ	地域社会 の中で	学 校	家 庭	学習塾や おけいこ	地域社会 の中で
1) 算数や国語の学力	8.0	1.6	0.3	0.1	8.3	1.1	0.5	0.1
2) 基礎的な体力	5.8	2.4	0.2	1.6	6.4	2.4	0.3	0.9
3) 友だちとつきあう態度	5.6	2.1	0.2	2.1	6.3	1.9	0.3	1.6
4) やる気やがんばりぬく力	5.0	3.7	0.3	1.0	5.4	3.2	0.7	0.7
5) 豊かな情操	4.2	4.1	0.3	1.4	4.5	3.7	0.5	1.3
6) 基礎的な生活習慣	2.8	6.2	0.1	0.9	3.7	5.4	0.1	0.8

注) 全体を10.0として、それを学校・地域社会、どこで身につけるのが望ましいのかを求めたもの。
(*「モノグラフ・小学生ナウ」vol. 4-12より)

3. 教師としての仕事



教師としてしていること

それでは教師たちは、教師として、どんな行動をとっているのでしょうか。図8によると、教師たちは、だれかをひいきにしたり、「お前はダメだ」などというようなことはまったくしていないつもりだ。体罰にしても、そんなことをするのは「たま」で、めったにしていないつもりだという。

そこで、子どもたちの評価（モノグラフ・小学生ナウvol.3-9「子どもの求める教師像」と教師の自己評価とのズレを求めてみよう。

1) 特定の子をひいき

	教師	子ども
①とても・わりとある	2%	< 26%
②たまにある	27%	29%
③まったくない	71%	> 45%

2) 「バカ」とか「ダメ」だという

①とても・わりとある	4%	< 11%
②たまにある	39%	> 27%
③まったくない	58%	62%

3) げんこつ、びんたをする

①とても・わりとある	9%	< 26%
②たまにある	65%	51%
③まったくない	27%	> 23%

このようにみえてくると、教師たちはひどい教師でないと答えているが、子どもたちの目を通すと、教師の反応とは別の姿が浮かんでくる。つまり、残念ながら、教師にいやなことをされたと思っている子どもは、教師が考えている以上に多い。

図8は、どちらかという、先生からされたいやなことの内容に近いが、図9に、先生

からしてもらったうれしいことの結果をまとめてみた。図中のプロフィールの示すとおり、みんなの前で特定の子をほめることはしていないかもしれないが、子どもに声をかけたり、休み時間に子どもと遊んだりしているつもりだという。

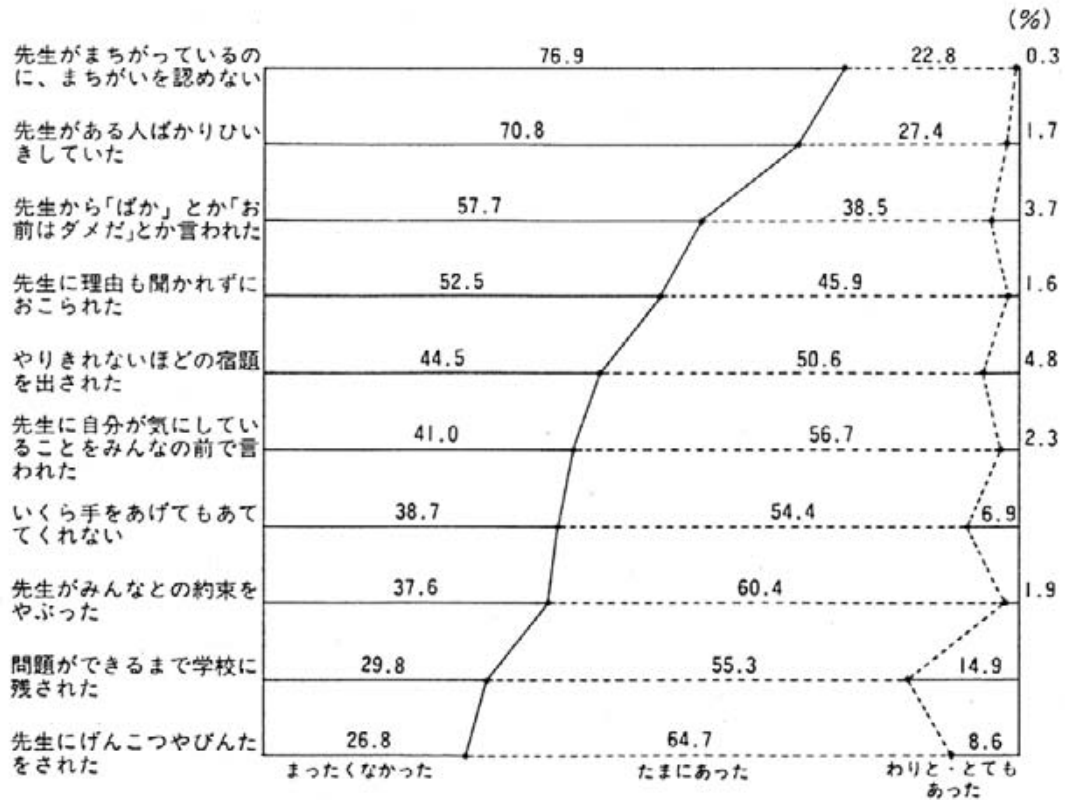
しかし、これは教師がそう思っているだけなので、子どもの声との対比を試みてみよう。

教師 子ども

1) 心に残る話をした			
①とても・わりとある	48%	>	39%
②たまにある	49%	>	38%
③まったくない	3%	<	23%
2) 悩みごとを考えてくれた			
①とても・わりとある	55%	>	16%
②たまにある	43%	>	31%
③まったくない	1%	<	53%

図8 教師としてしていること

— 間違ったことはしていないつもり —



この場合も、教師としては、子どもたちに心に残る話をしているつもりだし、悩みごとと一緒に考えているという。そうした気持ちは偽りでないと思う。しかし、子どもたちは、それほどしてもらっていないと答えている。

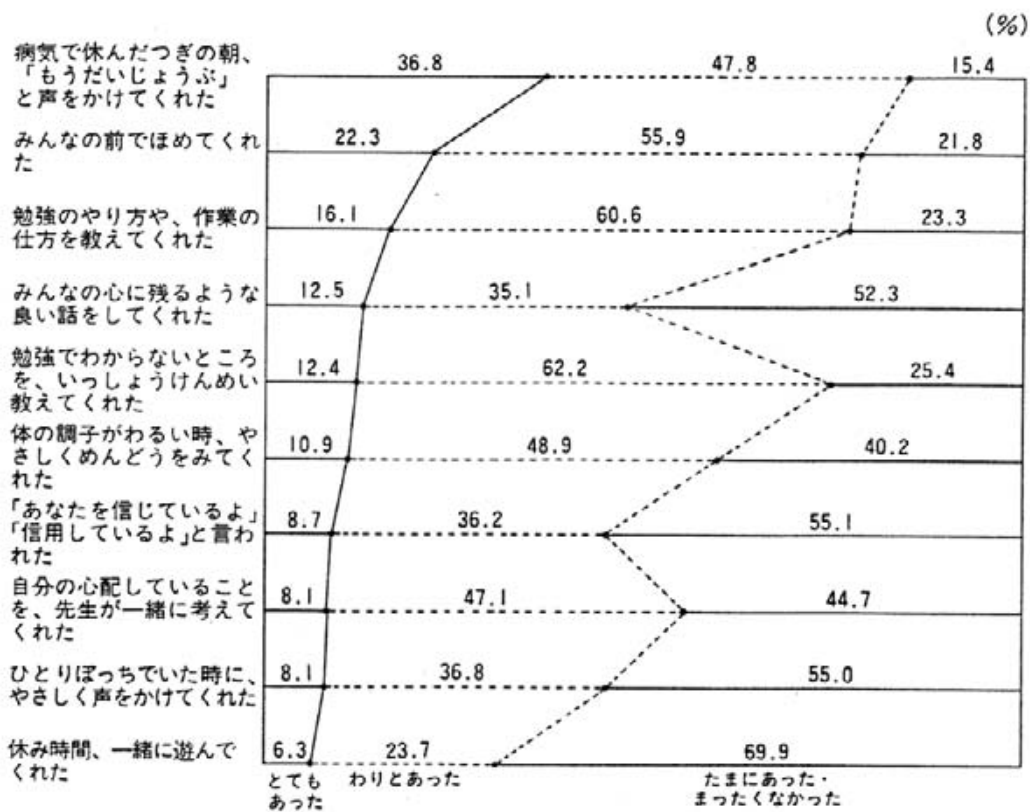
ここに教師の評価と子どもの気持ちとのズレが感じられるので、図10に対比をまとめ

てみた。

教師はいろいろしているつもりだという割りに、そうした行為は子どもの心に届かず、それと同時に、教師はしていないつもりでも教師からいやなことをされたと感じている子どもたちは多い。

図9 教師としてしてあげたこと

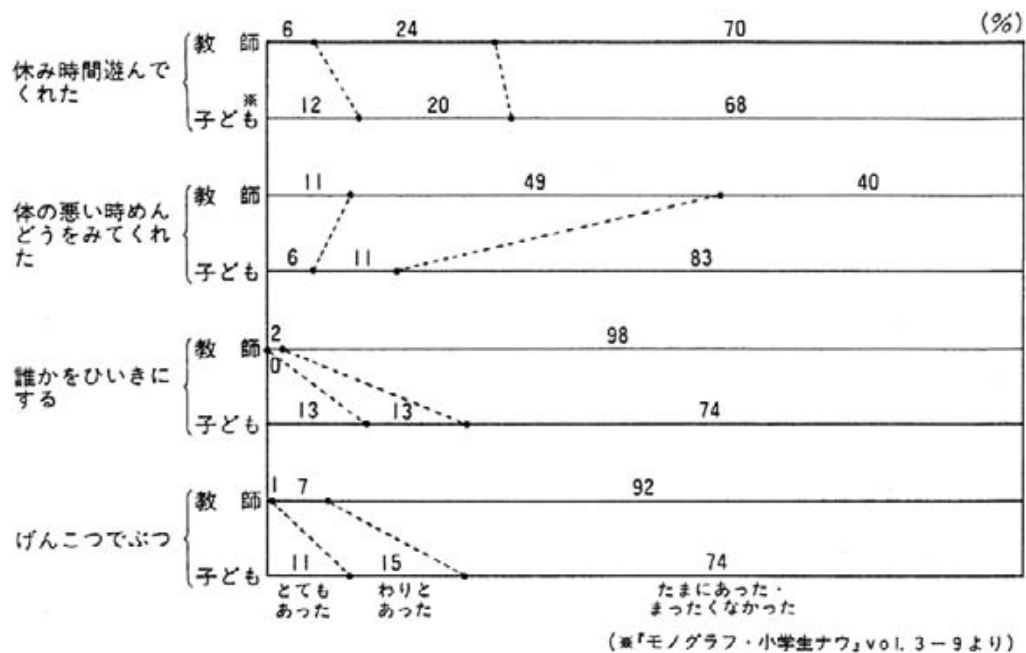
——子どもとふれ合っているつもり——



注)クラスの子は「先生にしてもらったことがある」と思っているかという設問に対して

図10 担任のしていること

— 子どもの見方とのズレが目につく —



教師として努力していること

1人の教師が40人の子どもの世話をしている。そうすると、教師としては、個々の子どもに気を配っているつもりでも、子どもたちからみて、不満に感じることもあろう。

そこらで、教師の仕事の持つむずかしさであろうが、教師が子どもをどれくらい理解しているかをたしかめるために、子どもたちの求める担任像をたずねてみた。結果は図11のとおりで、上位につきたくない教師が位置し、下位につきたい教師の属性が並ぶ。

そこで、子どもの評価と教師の見方とのズレをひとつのグラフにまとめると、図12のようなグラフとなる。この場合は、教師の感じ

方は、子どもの評価と基本的には一致している。「鉄棒ができるまで面倒をみてくれる」あるいは「きびしく叱るが、理由を教えてくれる」。そうした教師を求める子どもが多いが、教師たちも、子どもたちのそうした声に気づいている。

なお、図13は、あらためて、子どもの求める教師像を教師に推定させたものだが、「えこひいきをしない」、「子どもの気持ちをつかむ」「人間として信頼できる」教師を子どもは望んでいると教師は思っている。

子どもがそう望んでいるのはともあれ、それならば、実際に自分をどんな教師と認めて

図11 どのような教師に教わりたい(と思っている)か

— おどかさ先生には習いたくないだろう —

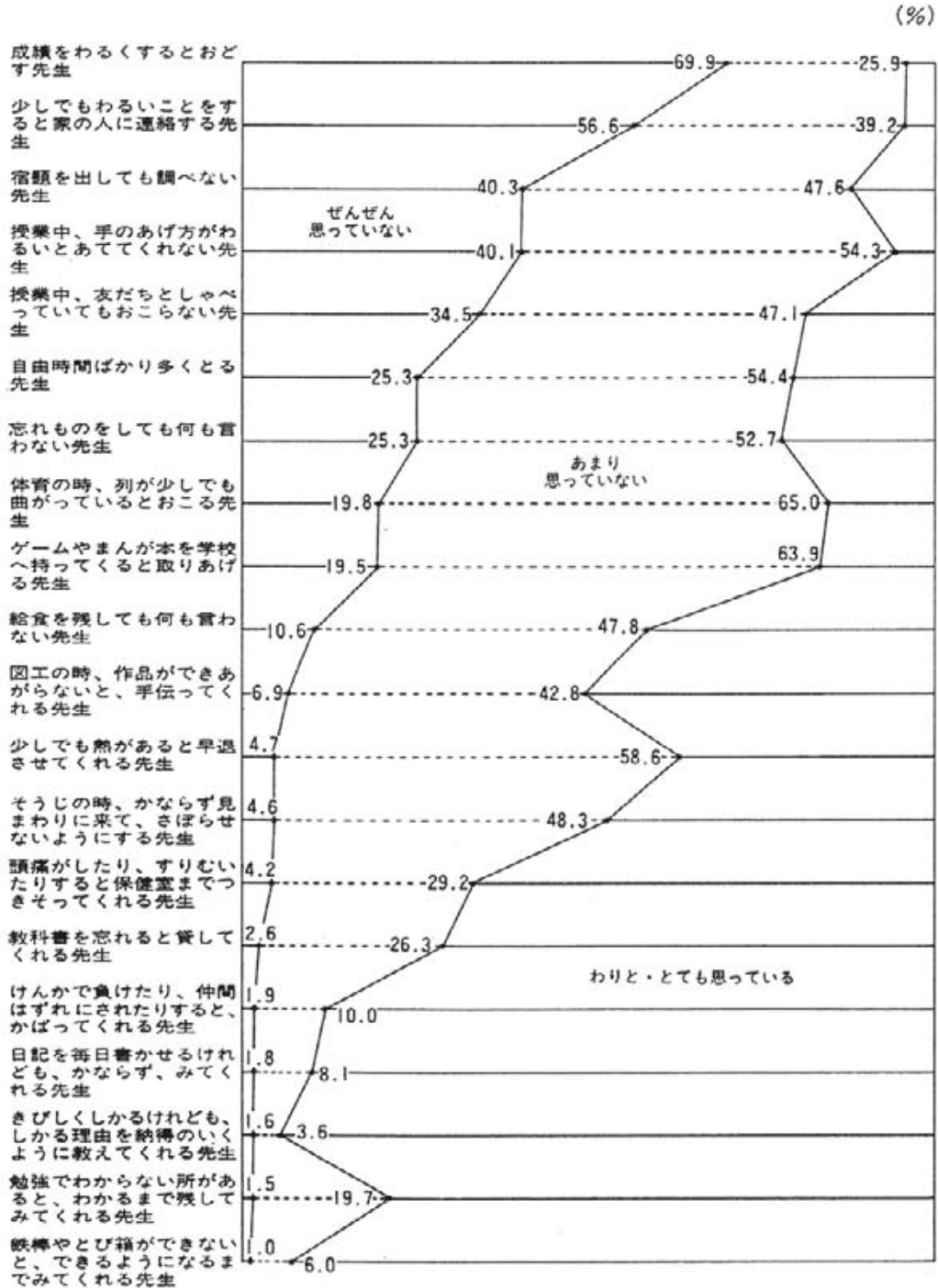
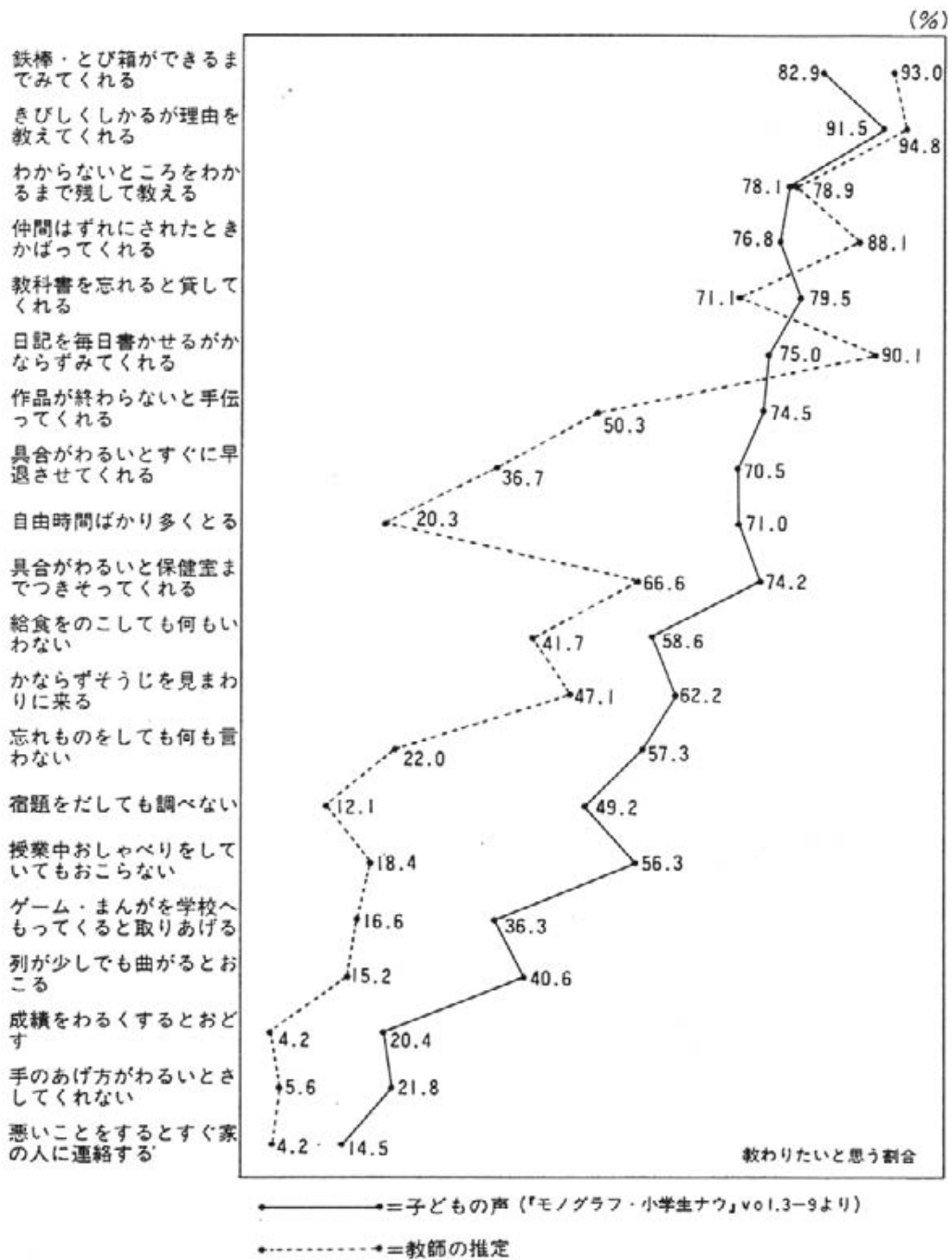


図12 どんな教師に習いたいか

— 子どもの見方と教師の感じ方はほぼ一致 —



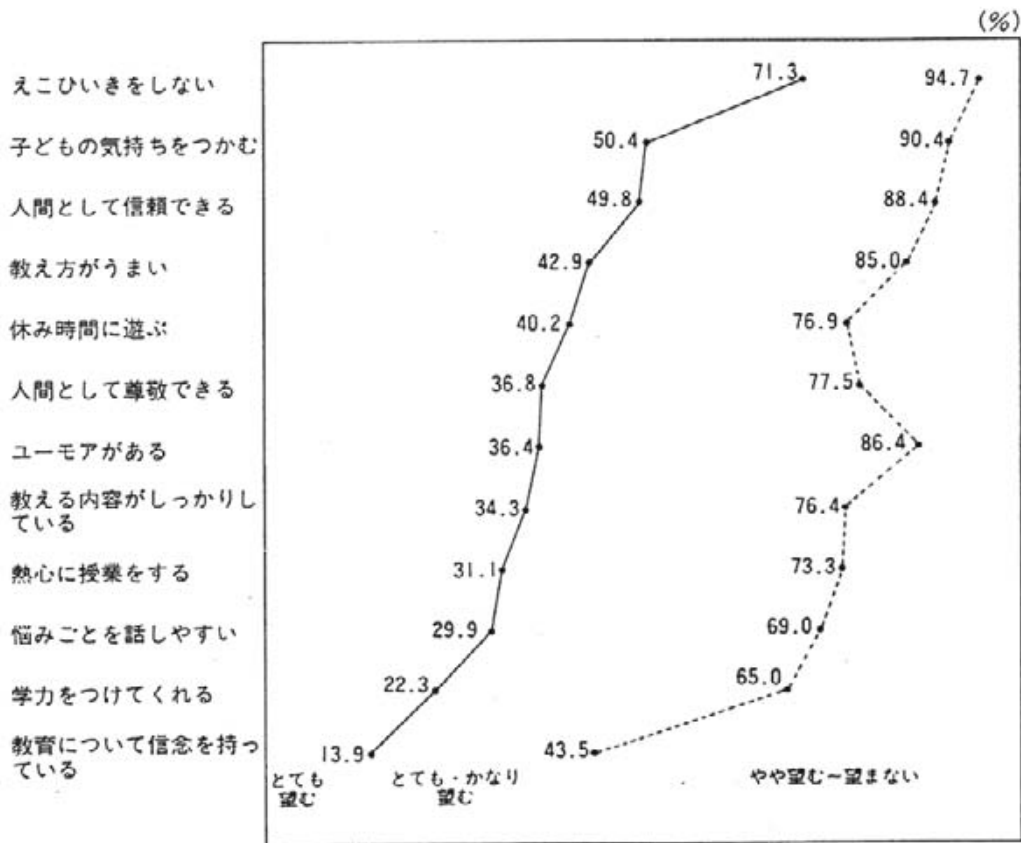
いるのか。教師としての自分について評価を求めると、図14のとおりとなる。教師としては、「えこひいきをしていない」し、「熱心に授業をしている」つもりという自己評価である。それと同時に、子どもの気持ちもつかん

でいるという自信もみられる。

そこで、教師として、子どもの望み（子どもが望んでいると思う）と教師自身の評価とをひとつにまとめると、図15のように、以下のような傾向が得られる。

図13 子どもはどんな教師を望んでいる(と思う)か

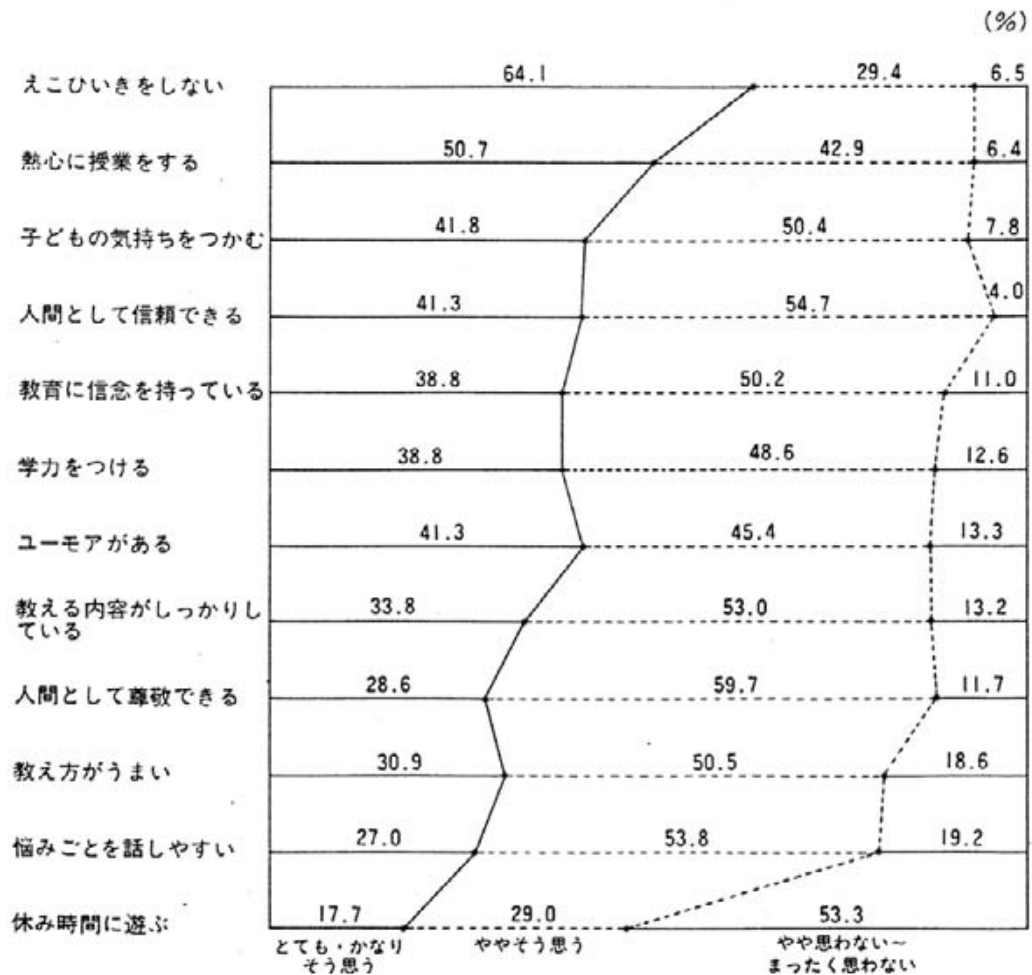
——えこひいきをせず、子どもの気持ちをつかむ先生——



- | | | |
|-------------------------------------|--|---|
| <p>1) 子どもが望んでいないが、教師として努力していること</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 熱心に授業をする ○ 学力をつける ○ 教育の信念を持つ | <p>子どもたちは望んでいないかもしれないが、熱心に授業に取り組む。そして、きちんとした学力をつける。そうしたあたりに心をくばっているのが、教師としての使命感なのだろう。</p> |
| <p>2) 子どもが望んでいないが、教師として努力していること</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 休み時間に遊ぶ ○ 教え方がうまい ○ 人間として尊敬できる | <p>実際にも教師として心がけていることは、</p> |

図14 自分はどんな教師だと思っているか

— 子どもの気持ちもつかんでいるし、熱心に授業をする —



との間に、図16のとおり机間巡視や赤ペンなど、授業中でのきめこまやかな対応をあげる教師が多い。

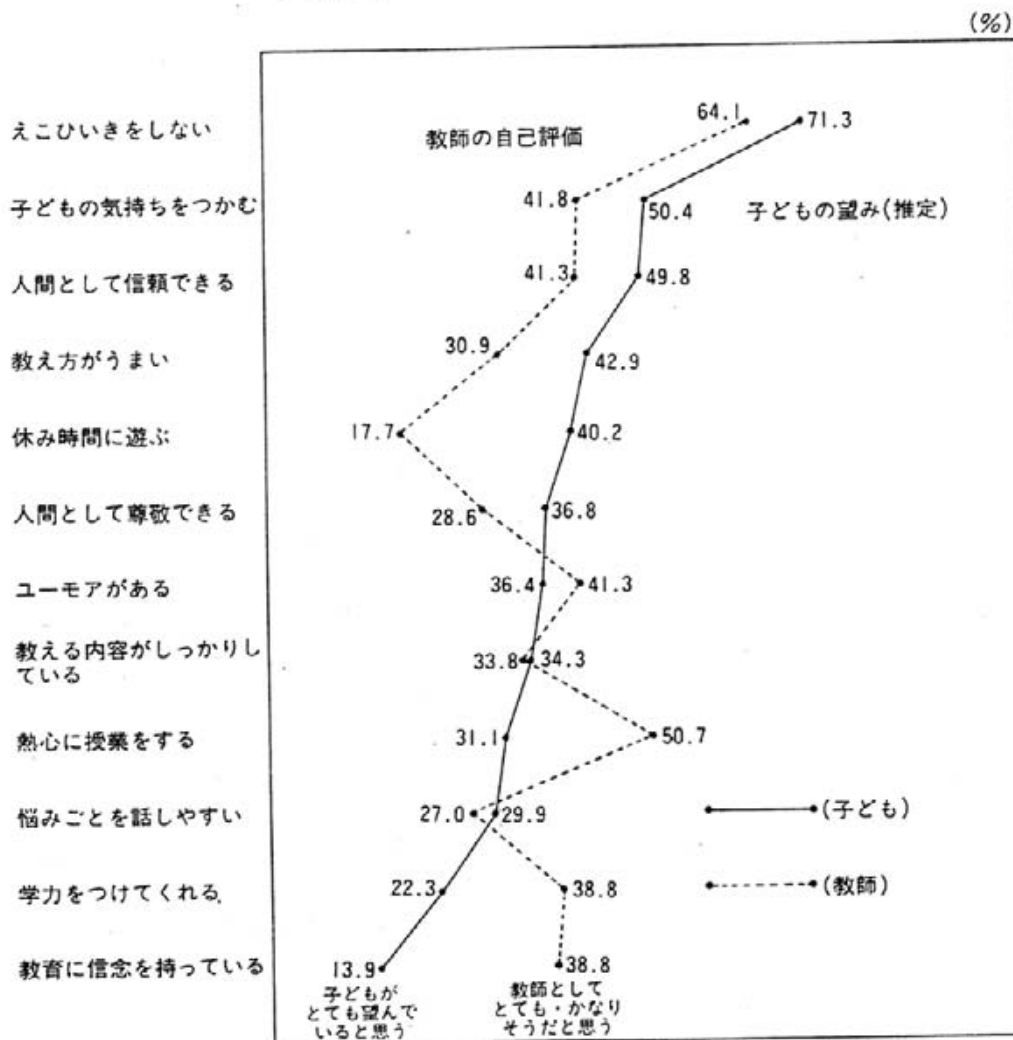
冒頭でふれたとおりに、欧米の教師と対比して、日本の教師は授業に熱心で、それに授業がうまいと思う。特に、集団の中での指導のたくみさは、目をみはらせるものがある。

そうした授業の苦勞が図16にあらわれている思いがする。机間巡視だけでなく、小テストや板書などにも心を配っているという。

なお、「教師として感じていることは」の間に、図17のように、「忙しすぎて子どもと接する時間がない」のを悩みの第1位にあげ、ついで「うまい授業ができない」が、悩

図15 子どもの望みと教師の自己評価

——子どもが思っているより熱心に授業をしているつもりだ——



みの種だという。

40人の子どもたちを相手に熱心に授業をする。そして、すでにふれた教師たちの生活時間から明らかなように、放課後、教材研究や会議などに時間を費やし、長い時間の勤務を終えて帰宅する。そうすると、授業については、ある程度までのことはできるが、子

もの相手になったり、悩みを聞いてやったりする時間がとれないのであろう。授業者としては及第だが、子どもたちの心の成長を促進する役割を担えないのが、教師たちの現在なのかもしれない。そして教師たちも、そうした現実気づいている感じがする。

図16 教師の心がけていること

——授業には気を使っている——

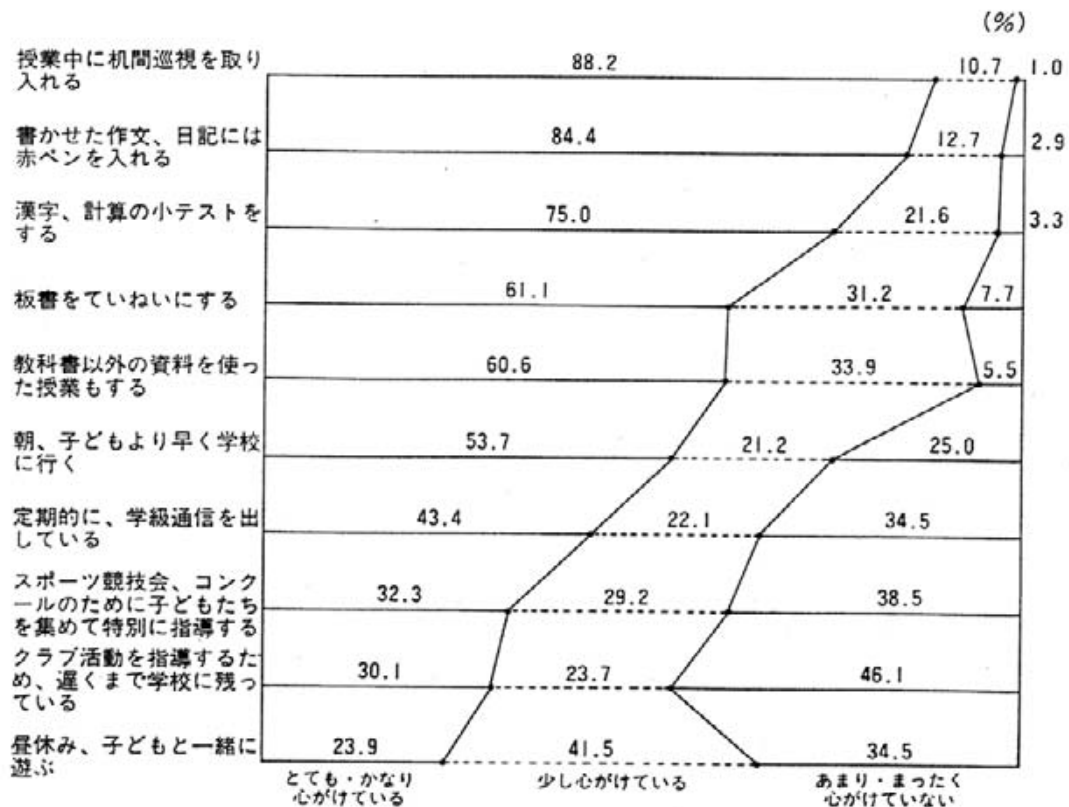
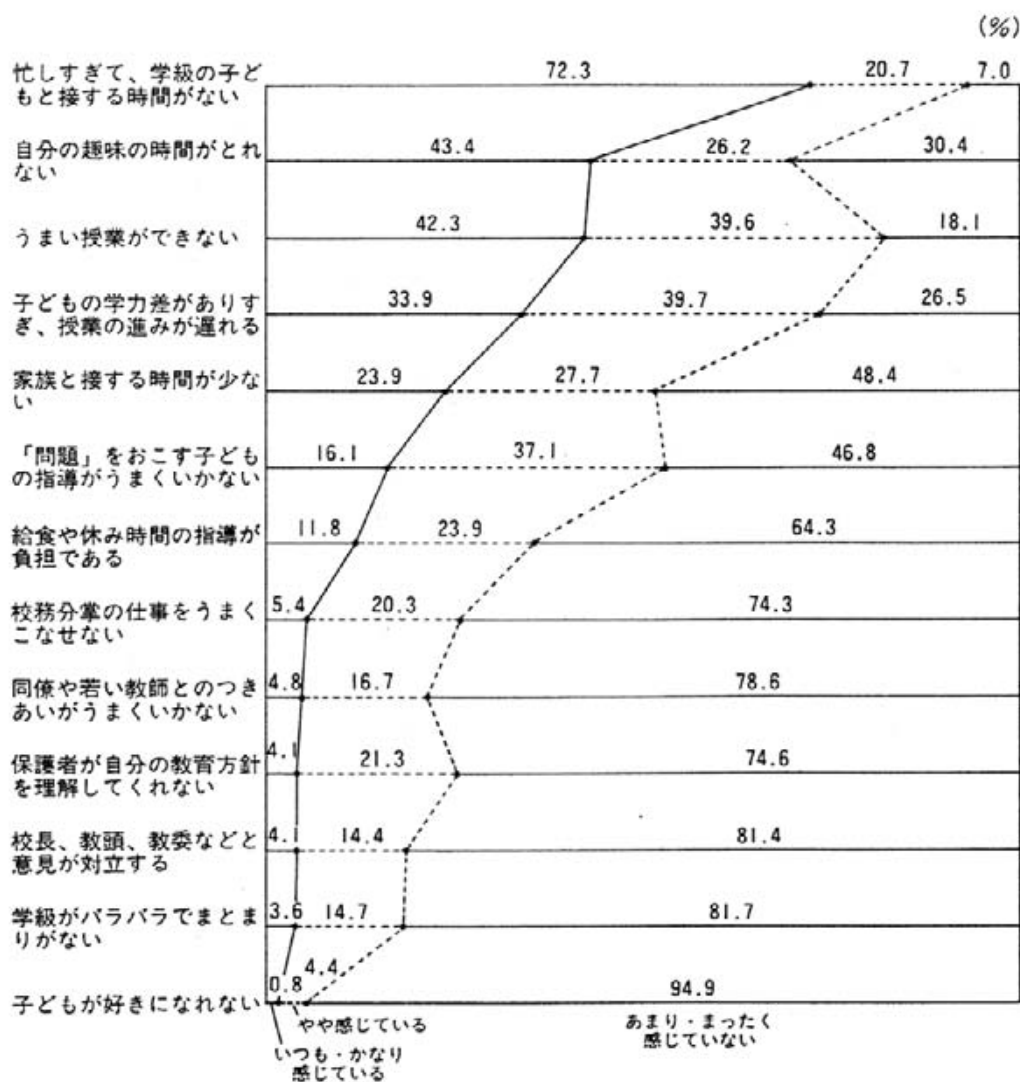


図17 教師の感じていること

— 忙しすぎて、子どもと接する時間がとれない —



4. 教職に対する評価



一人前の教師になるまでの期間

これまで、教師としての仕事についてふれてきたので、以下、そうした教職を、教師がどう評価しているのかを考えることにしたい。

表9は小学教師に対する社会的な評価を求めたものだが、やりがいがあると思うが、精神的に苦勞が多いと教職をとらえている教師が多い。

そして、教師としてかっこうがつくまでの期間をたずねられて、表10のように、2～5年をあげる者が7割を占める。サンプル平均は3年9カ月で、大学を出てすぐにかっこうがつくほどやさしくはないが、そうかといって、5年も10年もかけるほどむずかしくはないというのが、教職についての評価となる。

なお、一人前になるまでに「10年以上」と答えている者も多いが、平均値を算出すると、7年8カ月と、30歳になるころが、教師とし

て一応の完成をみる年齢だという。

本モノグラフ・シリーズの中で、「中学教師の生活と意見」(『モノグラフ・中学生の世界』vol.7)を分析したことがある。その中で、表10と同じ設問を行っているので、教師についての見方に、小学教師と中学教師との間で開きが認められるかどうか確かめてみた。

	小学教師	≡	中学教師
教師として 一人前と なるのに	3年以内	10%	9%
	4～5年	26%	24%
	7～8年	20%	24%
	10年	34%	35%
	もっと	10%	8%

したがって、一人前の教師になるための期

間について、小学教師と中学教師の意見が、ほとんどといっていいほどに一致しているのが目につく。大づかみにすると、10年かけて

一本立ちというのが、教職についての教師たちの一般的な意見なのであろう。

表9 小学校教師の社会的な評価

—やりがいがあるが、苦勞も多い—

(%)

項目	尺度		なんとも いえない	評価されていない	
	評価されている			あまり	まったく
やりがいのある仕事	17.0	33.1 (50.1)	20.6	11.5	0.8
	67.1			12.3	
精神的に苦勞が多い	12.2	34.3 (46.5)	13.7	24.5	3.1
	58.7			27.6	
経済的に恵まれている	12.6	21.1 (33.7)	29.5	21.3	3.0
	46.3			24.3	
時間的なゆとりがある	15.6	14.6 (30.2)	28.1	20.3	5.8
	45.8			26.1	
社会的に尊敬される	4.0	32.9 (36.9)	33.1	24.2	1.8
	40.9			26.0	
のんきで気楽な仕事	10.4	25.9 (36.3)	31.9	26.0	5.5
	36.7			31.5	

表10 教職の難易度

—一人前となるのに7～8年—

(%)

項目	尺度									
	大学を出てすぐ	3ヶ月後	半年後	1年後	2～3年後	4～5年後	7～8年後	10年以上	もっとも	たつて
教師としてかっこうがつくまで	1.0	0.9	2.0	8.2	33.8	36.2	8.5	9.5	—	—
	12.1				18.0					
一人前の教師になるまで	0.8	—	—	1.3	7.5	25.6	20.2	33.8	10.4	—
	2.1				—					

平均値 { かっこうがつくまで3年9ヵ月
一人前になるまで7年8ヵ月

セミ専門職としての現実

それならば教師たちは、そうした教職の現状をどう考え、どうなるのが望ましいと考えているのか。

表11によると、教師たちのうち、3分の1を上回る37%の者は教職を「教職を目指すセミ専門職」として評価している。それと同時に、教職を「専門職としての地位の確立した専門職」と考えている者が3割を超える。

正直なところ、専門職はそれなりの定義づ

けがあり、現状では教職を専門職の地位が確立されたとはみなしがたい。具体的に、専門職の条件を列举すると、以下のとおりとなる。

- ①高度でむずかしい知識や技術の習得を求められる仕事で、
- ②そのために、長期間の在学が必要とされ、
- ③その後も、たえず自己研修の求められると同時に、
- ④社会的に欠くべからざる重要な仕事で、

表11 教育の現状と理想

——専門職の確立へ——

(%)

項目	教職の現状	近い将来の方向	理想の姿
聖職者としての性格	14.2	8.0	15.5
賃金をもらう労働者	5.1	5.7	1.4
会社員のようなサラリーマン	7.2	20.4	0.6
教育技術を持つ教育技術者	4.5	14.8	3.0
専門職を目指すセミ専門職	37.0	14.8	4.7
専門職の確立した専門職	31.9	36.3	74.8

- ⑤社会的に尊重され、
- ⑥収入を目的とする仕事ではないが、高い収入を保証され、
- ⑦社会に尽くすという性格の強い、
- ⑧治外法権的な特権の認められた仕事。

この中で、⑧の「治外法権的」がわかりにくいと思われるので補足するなら、医師の資格を持っていない者が手術をすれば犯罪となる。あるいは、犯人と目されている人を法的に弁護できるのは弁護士に限られているのが、その一例である。したがって、その職種の資格取得をむずかしくすると同時に、資格所持者に、その領域についての特権を与えると換言できよう。

こうした説明から明らかなように、専門職が成立するためには、学歴やキャリア、資格、研修の仕方など、その職に従事する人たちの主体的条件が充実すると同時に、その職の重要性が社会的に認められ、特権が付与されるといった社会的な条件が満たされることが必要になる。

伝統的に、医師や弁護士、大学教授を「古典的な専門職」(old profession)とよぶ場合が多い。専門職としての主体的な条件も確立され、社会的な評価も定まった古くからの専門職という意味あいを持つ。これに対し、会計士や心理治療者、建築士などを、「新しい専門職」とよぶ。社会的な必要から、専門職

としての地位が近年になって確立された職種で、欧米などでは、古典的な専門職と並んで、新しい専門職の充実ぶりが目につく。

しかし「職業に貴賤はない」という言葉のとおり、どの仕事も、社会の中で重要な働きをしているのであって、その仕事についている人たちは、職業に誇りを持つだけでなく、仕事の持つむずかしさや重要性を、社会的に認めてほしいと考えている。その具体策として、専門の養成機関を作る、あるいは、国家試験を実施するなどの動きが、それぞれの職種なりに生じてくる。

したがって、現代は、どの職種も専門職化を目指している時代ともいえよう。しかし専門職を志向したからといって、どの職も専門職としての社会的に認知されるわけではない。専門職としての主体的な条件が不十分な場合、あるいは、主体的な条件が満たされていても、客観的な社会の見方が熟していない場合が少なくない。そのため、専門職を目指してはいるが、まだ、地位が確立されていない職種が生まれてくる。「専門職を目指している職」

(Would be profession)とよばれる職種群である。そうした職種として、税理士や心理治療士、看護関係の仕事などがあげられようが、教職も、ILO 勧告のとおり、専門職を目指している職種のひとつに属そう。

専門職への道

もう一度、表11へ戻ると、教師たちも、教職の理想の姿は、専門職としての地位の確立した形だという。そうした意味では、教職はセミ専門職なのであろうが、参考までに中学教師を対象とした調査(『モノグラフ・中学生の世界』vol.7)から、教職の位置づけについてのデータを示しておこう。

表12を表11と対比させると、以下のとおりとなる。

		小学教師	中学教師
現状	セミ専門職	37%	< 55%
	専門職	32%	> 15%
近い将来	サラリーマン	20%	> 17%
	専門職	36%	> 32%
理想	専門職	75%	< 81%

したがって、中学教師のほうが、現実をきびしくみつめていると同時に、専門職への願

いはより強いように考えられる。

そこで問題となるのは、教職の未来像が専門職にあると考えた場合、そこへ至るすじ道を、教師たちが、どう考えているかであろう。専門職としての教師像が明確にされない限り、

専門職化は画中の餅に終わってしまう可能性が強いからである。

表13が示しているように、専門職化への道として「教材研究をする」が第1位を占め、以下きびすを接する形で、「教育の見方を深

表12 教職の現状と未来(中学教師)[※]

(%)

項目	現 状	近い将来の可能性	望ましい方向
専門職を目指しているセミ専門職	55.1	23.0	4.4
専門職の地位の確立した専門職	15.1	32.1	80.7
会社員と同じようなサラリーマン	10.1	17.2	0.7
聖職者としての性格の強い職業	7.0	7.4	11.8
賃金をもらう労働者	6.7	6.8	1.0
教育技術売り物とする教育技術者	6.0	13.5	1.4

(※「モノグラフ・中学生の世界」vol. 7より)

表13 専門職化に必要なもの

—教材研究と教育の見方—

(%)

	小学教師	中学教師 [※]
教材研究	10.0	20.9
教育の見方を深める	19.0	28.5
子どもの心理	18.9	16.5
授業の仕方	16.8	14.5
人柄を魅力的に	14.8	7.1
学級集団のリード	5.8	5.4
社会についての見方	2.3	2.7
一般教養	2.3	4.4

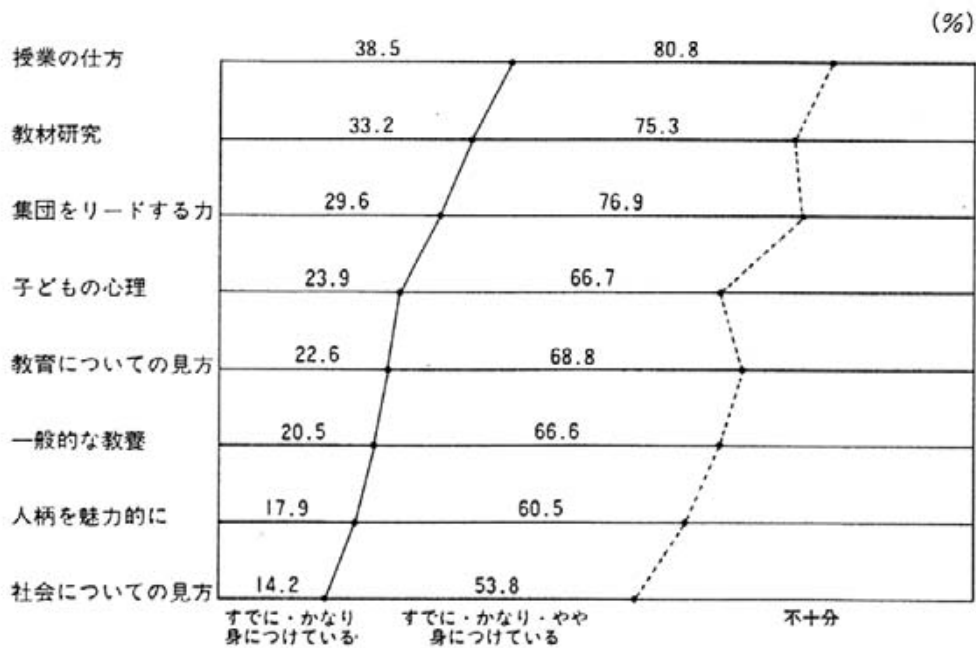
(※「モノグラフ・中学生の世界」vol. 7より)

める」「子どもの心理を研究する」が続く。確かに教育についての見識を持ち、子どもの心理を理解した教師が、教材研究を重ねて授業に熱心にとりくめば、秀れた教育実践が展開できるのは事実であろう。だが、それらの中でもっとも重要なものは何かとなると、はっきりとした方向性が打ち出されていない。表中に、中学教師の反応を参考までに示したが、小

学教師に「人柄を魅力的に」が多いものの、その他の面については、小中学教師の反応は、ほぼ同じ方向を示している。

なお、図18に、「まわりの教師は専門職としての力量を身につけているか」の結果を示した。残念ながら、専門職としての力量が「すでに」「かなり」身につけているといいがたく、現状では「やや身につけている」程度だとい

図18 まわりの教師は専門職の力をつけているか
—— 授業については力がついている ——



う。そうした中で、授業の仕方などは、かなり専門職へ近づいているという評価がなされている。

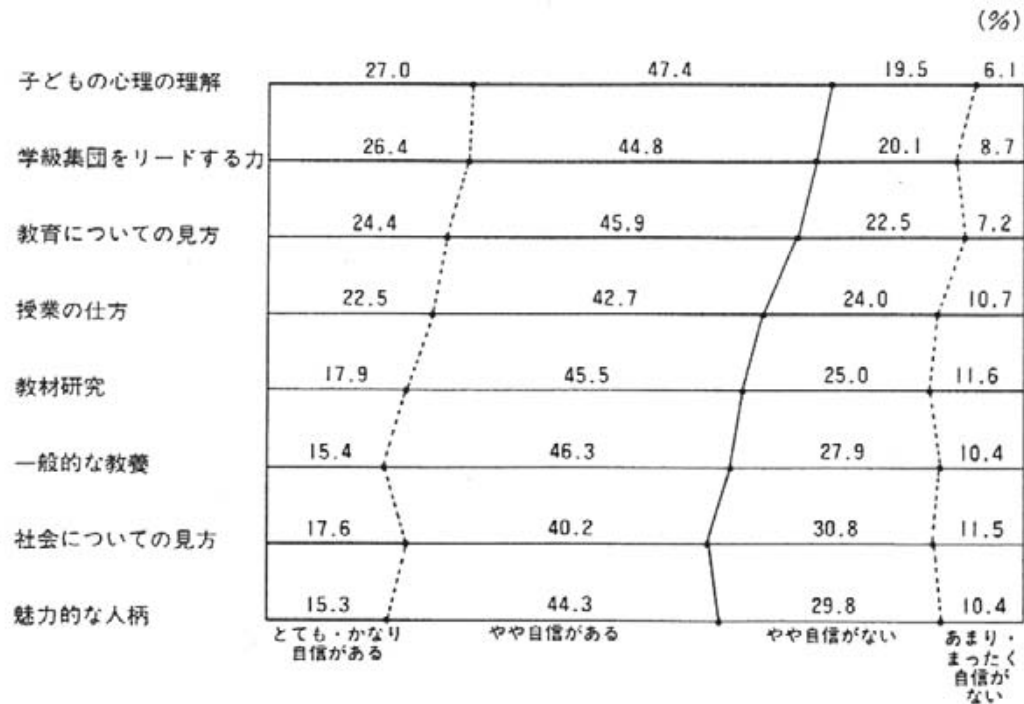
図19は、教師としての自信がある領域をたずねたものだが、ここでも、「とても」「かなり」自信のある領域は少なく、自信は「やや」ある程度という反応がほぼ4割に達している。

まじめに頑張っているつもりだが、なにか

と多忙で、思うように子どもの相手ができない。それでも授業だけはこなしていると思う。しかし、それ以上子どもの中に入れない。そうしたもどかしさを、多くの教師が感じている。そして、そのもどかしさから生じる問題が、現在の教師批判の中核をなすものなのであろう。

図19 教師としての自信

—「とても」とはいえないが、「やや」自信はある—



まとめに代えて

午後4時までの勤務に

*

これまでふれてきたことを要約すると、授業には直剣に取り組んでいる。しかし、子どもたちの心を十分につかみきっていないのが教師に対する全体的な印象となる。そしてそうした土台の上に、体罰やいじめなど、教師をめぐるさまざまな問題が生じてくるのであろう。

考えてみると、教師は、そうでなくとも、権威を持ちやすく、マンネリ化しやすい状況の中で生活している。なによりもまず、教師と子どもとの関係は、おとな社会の権威を代表した教師が、一定の知識や技術の習得を、被教育者である子どもに求めるので、教師の圧倒的な優位の形となりやすい。つまり、単なるおとなと子どもの関係でもおとなが優位なのに、教育者と被教育者の関係が加わるので、教師の権限は、ヘッドシップとよばれるほどの強さを持つ。

さらに、教育の行われる場、教室は、教師以外のおとなが入りこむことが少ない密室を構成している。考えてみれば当然で、学校内の教師はそれぞれの授業を担当しているし、校長などの管理職は、よほどのことがない限

り、教室をのぞくことはしない。したがって、通常の教室内で、教師はリリパットに住むガリバーのような巨大な存在となる。

そうした密室文化も、授業参観や研究会などの折に、公開されることがあるが、それは、月に1～2度で、限られた時間内にすぎない。

さらにいえばすでにデータでふれたとおり、教師たちは朝早くから登校し、そして夕方、ときには、夜遅くまで在籍しているので、世間とのつき合いが乏しく、学校の中がすべてとなりやすい。もともと学校は子どもたちを除くと、親くらいしか入ってこない閉鎖社会の性格が強い。しかも親たちは、担任から子どもを評価されるので、教師との間に、純粹な人間同士といった横の関係を持ちにくい。

つまり、閉鎖的な学校の雰囲気の上に、密室的な教室の条件が重なり、教師の力はカリスマ的なものとなりやすい。しかも、学校や教室の中では、教師がそうしたカリスマ的なヘッドシップを合法かつ妥当に行っているかどうかをチェックする機構に欠ける。そのため、教師は、ともすると、巨大な権限の持ち主である状態に慣れ、そうした力を持ってい

ることを当然のように思い始める。

そうなると、力そのもの、そして、力の行使を自戒する気持ちが薄れてくる。その結果、子どもたちを教える対象とみて、子どもを統制する態度が強まりがちになる。教師の体罰などが問題になるのは、そうした風土がうみだすものなのであろう。

もちろん、実際の教室では、カリスマのように子どもたちに君臨する教師は、決して多くはない、というより、子どもたちの心に気を配りながら、学級を運営している教師を見かけるほうが、むしろ、一般的ですらある。つき放した見方をすれば、教師は権威主義的になりやすい機構の中で毎日を送っている。それにもかかわらず、権威があらわにならない。それは、教師たちが、教育者としての職業意識から、子どもと接する時に、子どもの心を開くためにも、子どもの背の高さに合わせた態度でのぞむ必要があると感じているからであろう。つまり、すでにふれた教師のヘッドシップが行きすぎているかどうかを抑制するのは、教師自身の良心、あるいは、職業倫理のように思われてならない。

そして、多くの教師がそうした自戒をこめて教壇に立っているのはわかる。しかし、このレポートの中で、やはり気になるのは、在校時間の長さであった。密室のような学校の中で、毎日10時間以上同質の人たちと籠っていたのでは、感覚がマンネリ化し、いつの間にか、ものの見方が独善的となる。

教職は新鮮な感動を持って子どもに接することが、なによりも不可欠だと思う。それだけに、会議などの合理化を図り、在校時間を短縮し、ゆとりを持って教壇に立てる生活のリズムを作ることが望まれよう。ちょうちん学校はけっして美德ではない。というより、疲労から感覚をまひさせる悪習でもある。

教師たちが、給食や休み時間でも子どもに目を注いでいることを考えると、8時に登校し、午後3時、せめて4時までには仕事を終える体制作りが望まれよう。リフレッシュされた感覚の中から、子どもに対するきめ細やかな対応が可能になると思うからである。

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。